今、一番読みたくない小説？　かもしれない

2020年4月

眞鍋由比

『ペスト』カミュ著　新潮文庫　1969

今、とある書店では1人1冊までと制限するくらい、売れている本です。なぜならコロナウィルスで緊急事態宣言が出た日本の現実と重なっているからです。

アルジェリアのオランという美しい都市はカミュの生まれた街。第二次世界大戦後の設定です。医者リウーが階段で何かにつまづく。ネズミ？でも街のいたるところでネズミの死体。ヘンな死に方をしている。そして彼は人間にも同じ兆候を見る…。

「ペストです。早く周知してオラン全体で警戒しないと…！」と主張するリウーに対して会議に出席した街の権力者たちは「まだじゅうぶんに確認できていないし、そんなに大げさにすると大変なことになるから」と警戒態勢をしくのを嫌がり、対応が後手後手になったあげくペストが大流行して都市がロックダウンされます。

妻（恋人）がパリにいる新聞記者はなんとしても都市から逃げだそうとする。今まで小役人と馬鹿にされてきた人物がボランティアで人に頼られるようになる。密売で逮捕されかかってた悪人が物品調達で大活躍…。非常時の人間の立場が変わっていくのが見ものです。が、それよりも死者数の発表が一週間単位だったのが、一日単位に増えたり、デマでものの買占めが起きたり（ハッカドロップが消毒に効くと思われた）、病院の不足が問題になったり、薬の開発が遅れたり…まるで今の日本そっくりではありませんか？

このペストは天罰だと主張する雄弁な司祭、彼にも他の人にも不条理な死が襲う…。だれよりも危ない場に居た者が生きて、安全安心と思われた所に居た人が死んでしまうシニカルな結末。『ペスト』は今の現実にあまりにもリンクしていて、少し怖くなるかもしれません。

ペストではありませんが、1918年から19年に流行ったスペイン風邪での死者は第一次世界大戦の戦死者よりも多かった。当時、戦争に参加している国は風邪でも死者の状況を隠していたから、中立だったスペインで「ヘンな風邪がはやっている」という情報が出されて「スペイン風邪」と名づけられたそうです。病気についての情報も国や誰かに都合が悪ければ隠されるでしょう。コロナウィルスがパンデミックとなっている今、日記とかつけておくといいかもしれません。みなさんはまさに今、歴史を体験している。

でも知っていますか？ニュートンが万有引力を発見したのはケンブリッジ大学がペストで2年間休校していた時でした。ずっと家にいなければならないのは苦痛ですが、まとまった時間にしかできないことを集中してやるのも手です。絵を描く、作品を作る、本を読む・・・。ふだん、忙しいあなたたちにとって【創造的休暇】
になるかもしれませんよ。